

「…」

（侑奈は〇〇からの視線が気になり、話す）

「ねえ、何さっきからチラチラ見てんの？集中できないんだけど…」

（なんで俺がこんな事しなきゃいけないんだ、と〇〇が話すと、侑奈は呆れたように口にする）

「はあ…だから、さっき言ったでしょ？この資料まとめるのすごく大変なの。一学年分綴じないといけないんだし、ちゃんとページ通りにまとめないとダメだし。」

「とにかく、こんな量の資料を二人で作ってたら朝になっちゃうもん。だからあなたに手伝ってもらってるの。」

「分かった？ならちゃんと手を動かして。」

（独り言を呟くように侑奈が言う）

「はあ…なんで広報委員なんてなっちゃったんだろ…」

（○○の様子を見て、気になったように口にする）

「ん？どうしたの？指押さえて…って、血出てるじゃん！紙で切っちゃったの？もう、ドジ…」

「持ってる絆創膏」枚あげるから、とりあえず水道で洗ってきて。」

（○○が水道で血を洗い、戻ってくると侑奈が冷静に話す）

「ちゃんと洗ってきた？ん、はい、絆創膏。これ貼ってまた作業の続きやるんだから。」

（○○が絆創膏を貼るのに手間取っていると、呆れたように侑奈が口にする）

「全然貼れてないじゃん…片手だから難しい、って…高校生にもなって…人でこんなこともできなくてどうするの？全く…ほら、手出して。貼ってあげる。」

（〇〇への指に絆創膏を貼りながら、小さく呟く）

「…綺麗な指…」

（侑奈は我に返ると絵に描いたように焦り出して）

「へ？あつ、いや！なんでもない！なんでもないから…！…ほら！絆創膏貼ったから早く作業の続きやるよ…！」

（〇〇がこちらを見ていることに気づいて、焦りが残っている侑奈が口にする）

「っ…なに…」

（○○に顔が赤いと指摘されるとまたも焦りながら侑奈は口にする）

「っ…！顔赤いとか、指摘するなバカ…！！」

（○○に対して、焦りつつも少し強めに侑奈が言う）

「はああ…このこと、誰かに言ったら殴るからっ…」

（なんで？と○○に聞かれると声を荒らげるように侑奈が話す）

「当たり前でしょ！？周りから真面目って言われてる私が男の人の指なんかに見とれちゃうなんて、どんなイメージになっちゃうか…」

（侑奈は少し冷静になるがやはり焦りは残りながら）

「…だから、誰にも言わないで…こんなこと、ほんととはあなたに頼むのは不服だけど…」

「もうここまで見られちゃったんだから、あなたには隠さないわ…だから、私たちだけの秘密にしてて…」

（〇〇は対価を要求する。侑奈はまたも声を荒らげて〇〇に問い詰める）

「はああ…！？対価…！？こ、高校生でそんなこと考えるなんて…いやしい…」

（〇〇がこのことを言うと言口になると、侑奈は弱気になる）

「あ、やあ…言わないでってばあ…」

（仕方なさそうに）

「っ…分かった…あなたからの頼まれごとで私の世間体を守られるのなら…言うこと、聞いてあげる」

（侑奈は少し冷静になりながら○○に聞いて）

「で、何すればいいの？課題のお手伝い？テスト対策？もしかして、お金とか？」

（○○に隣に来るよう言われると、侑奈はキョトンとして）

「え、隣にいいばいいの？まあいいけど……」

「はい、来たよ。それで？どうするの？」

（○○にソックスを脱ぐよう言われると少し怪訝そうに）

「えっ……？ソックス脱ぐの……？なんで……？」

「そりゃ気になるでしょ……！突然靴下脱ぐのを強制されたら……！」

「わ、分かったって……脱げばいいんでしょ……！」

（ソックスを脱ぐと少し恥ずかしそうに）

「…ほら、脱いだよ…これで満足？」

（〇〇に足に乗せるよう言われると少しビクリしながら）

「ええ…！？あ、あなたの膝の上に乗せるの、脚…」

（足に乗せることを躊躇いながら）

「だって、一日中ずっと履いてたし…体育とかもあったし…」

（弱気になり）

「い、嫌だってばあ…誰かに言われるのは、嫌、だけど…あなたは、いいの…？」
「だから、その…汚い足に乗せられるの…」

（女子の足で興奮するという〇〇の発言に、顔をしかめながら）

「じよ、女子の足で興奮するとか…変態すぎる…」

（少し強く）

「分かったってば…！！乗せればいいんでしょ乗せれば…！！」

「っ…！ほら、乗せたよ…！もういいでしょ…！？」

（急に足を持ち上げられて驚きながらも恥ずかしそうに）

「きゃっ…！ちよ、ちよっど！急に脚を持ち上げないで…！スカートめくれちゃうから…！」

（強めに）

「スカートの中見たら絶対殴るっ…」

（○○がスマホを構えると怪訝そうに）

「な、なに、なんでスマホなんか構えて…」

（動画を撮られると強めに）

「動画撮ってる、って…！バカ！そんなことしないでよ！」

「動画撮影が趣味なのはいいけどっ、時と場合を考えなさいよ！」

（足に顔を近づけられてビクッとしながら）

「…やだっ…そんなに足を顔に近づけないで…」

（足を舐められて驚きが大きくなり）

「ひゃああ…!!? い、今何したのっ…!!? なんか足の裏にあったかいものが…」

「ひゃっ…!!! えっ…な、舐めてる…!!?」

「きゃあ…!!! ば、バカ! バカバカ! き、汚いからあ…!!」

(少し気持ちよくなりながらも嫌がって)

「やあっ…やだあ…舐めないでえ…」

「い、言うこと、聞くっ、けどおっ…こ、これはっ、やだあ…」

(舐められた場所がくすぐったく笑い出し)

「あっ、あははっ…ゆ、指の付け根は、くすぐりたいからあ…!! きやはははっ!!」

(敏感な場所を舐められてビクビクして、呼吸が荒くなりながら)

「ああっ…!!! ゆ、指の間は、だめええ…!!」

「あっ……！んんっ……！や、やだっ……変な、感覚……」

「んんっ……体がっ、反応しちゃうっ……あっ……！」

「んっ……あっ……やらっ……らめえっ……んん……っ！」

「あんっ……ああっ……！やあ……らめらめっ……！やらあっ……！」

（限界になり小さく叫ぶように）

「ひやあああっ……！」

（○○の顔を蹴ってしまい我に返って）

「あっ……！」

「ご、ごめん……顔、蹴っちゃった……」

（心配そうに）

「えっと…大丈夫…？」

（弁解するように）

「ち、違う…！わざとじゃないから…！」

（必死に弁解していて）

「そ、そもそも！あなたが、私の足を、な、舐めてきたからでしょ…！」

（すぐに弱気になり）

「…あ、や、やだっ…このことまで言われたら、私もう学校来れなくなっちゃうからあ…ごめんってばあ…」

「わ、分かったから…他にも言うこと聞いてあげるから…だから言わないで…」

(キョトンとしながら)

「…へ？お仕置き…？」